



Exhibition #06

木藤 恭二郎

# 希望の痕跡

2021年5月1日-7月25日

## 一 絵画の制作をはじめたきっかけは？

子どもの頃から、作ったり、描いたりが好きで。夢中になると、まわりを忘れて、自分の世界に入れるじゃないですか。学校へ行っても、美術だけは良かった。だから迷いはなかった。数学や英語もできたら、迷っていったんじゃないかと(笑)。中学の先生が絵を認めて、展覧会に出してくれて。美術の授業になると、胸を張って(笑)。

## 一 絵で生きていこうと自覚も出てくるわけですね。

長いあいだには、生活や進路も変わるけど、絵を夢中になって描くことだけは変わらないと思ったから。まわりの環境や生活はどんなに変わっても、それだけは自信がありましたね。

## 一 作家一本で生きていく人もいれば、仕事を別にもって制作と両立させる人もいますね。

自分の場合は、絵だけで生活はままならないし、おまけに結婚して子どももできて。

## 一 そのときには、お仕事は？

物理的な時間というより、精神的な時間を絵に向けられる仕事がいいんじゃないかと思って、町工場で溶接関係の仕事をしていました。

## 一 職場は近かったんですか？

同じ川越です。でも最初は残業があったんだよね。残業すれば、みんな残業代がもらえる。でも、こっちとしてはそんなに残業したくない(笑)。おまけに子どもは保育園だしね。子どもはけっこう好きだったから、家庭も大事にしようと。

## 一 夫婦で働いていらっやっただけですね。

家族を良い雰囲気にしたかと思って、それをけっこう大事にしていたから。

## 一 残業してられないですね。

仕事に関しては優秀だったんですよ。正確で、早くて。それで5時になると子どもを迎えに行きますって言う。そうすると経営者がね、木藤くんは凄い、と。短い時間で仕事して早く帰るから、残業代もかからない。みんな見習って(笑)。

## 町工場の仕事の合間に制作のためのメモを描き続けた

### 一 どういうお仕事をされていたんですか？

大手企業の発注を受けて、鉄板を機械で切っていくんです。切り終わるまで5分とか10分とか、機械を見ているだけの時間があるから、その間に制作のためのメモを描いて(笑)。

### 一 膨大なメモが生まれてくるんですね。違うことを考えていて、仕事は失敗しないんですか？

仕事はけっこう優秀だから(笑)。だいたいコツがあるからね。ここを注意しようとか。

### 一 熟達して、違うことを考えても大丈夫になって。それは理想ですよ。仕事と制作を両立できる。

夏は工場だから、けっこう暑いんだよね。鉄でしょ。40度とか。冬はね、鉄が冷たくて、マイナス2度。そういうところでやって。でも、香月泰男はマイナス35度でしょ(笑)。

### 一 香月泰男はシベリア抑留ですからね。

それと比べたらね、マイナス2度は……でも香月泰男より年月はずっと長かったから、同じくらいかな(笑)。

### 一 それで定時に仕事をあがって、お子さんたちとも時間を過ごして、寝静まってから……

8時、9時頃に寝たら、あの頃は30代、40代で若いから、夜2時頃までできたんだよね。次の日6時頃に起きて大丈夫でした。

### 一 それでまた仕事に行く。休みは週末ですか？

土日ですね。最初は日曜だけだったけど、だんだん週休2日になって。ああいう仕事は、家で考え



てもしょうがないじゃないですか。家に帰ってきたら全然考えない。休みの日も考えない。それは良かった。

### 一 その頃から、こんな絵を作られていたんですか？

最初は合板を四角く切って重ねたりして、半立体的な作品。それをボルトで止めるのに、ドリルで穴を開けて。持ち上がらないほど重くて。だんだん、一枚でも迫力があるものが出せるかなと思って、彫り込んでいくようになって。

### 一 それは大きな変化ですよ。モノとしての立体から、そうではなっていくのだから。

その頃の作品もまだありますね。大きいのは150号くらい。最初にコンクールに出したのは、1989年の現代日本美術展。そのときは鉛丹塗料一色。鉄筋に錆び止めの塗装をすると朱色がきれいなんですね。マットで、むらがなくて。その頃はもう子どもが小学生になっていたから、だんだん制作ができるようになった。

### 一 その前はなかなかできなかった？

エスキース(下絵)だけはやってたんだけどね。子どもの成長の絵本は描いてたかな。

### 一 家族のために制作をしていたんですね。

初めて海に行ったりとか、初めて空や雲を見たときとか。それを絵本に描いてね。

### 一 その頃は、発表はしていない？

してないですね。

### 一 でも、1989年からはずっと継続的に作家活動をされていますね。

そうですね。仕事があって時間がなかったから個展はできなくて、コンクールに出して……

—コンスタントに賞をとられていますよね。

賞をとったら、表彰式に行つてね。

## 黒鉛を指でこすっていくと、鉛みたいなのに質感が出る

—半立体から変わってきたのはいつ頃ですか？

1998年の宇部絵画ビエンナーレあたりですね。宇部は絵画と彫刻を交代でやっています。

—宇部は野外彫刻で有名ですよ。その頃から変わりはじめた。きっかけは何だったんですか？

きっかけは……

—重たいから？(笑)

重たいってのもあるのと(笑)。その頃、半立体が朱色から黒鉛になったときがあった。

—なぜ黒鉛になったんですか？

よく言われるのは、川越に住んでいるから、蔵の影響じゃないかって。

—川越の蔵は黒漆喰の壁が特徴ですね。

潜在的にはあるのかもしれないけど、やはりモチーフになるきっかけのものが黒じゃないですよ。鉄の板にも黒皮っていうのがあるんですよ。

—ちょっと金属的な。

その美しさみたいなものが……。黒鉛を指でこすっていくと、鉛みたいな感じの質感が出る。小学校のとき、鉛筆で机をこすると、鉛色になって。

—黒鉛の質感を生かすため平面になった？

そうですね。黒鉛の色の質の良さ。半立体だと、影が強くなっちゃう。

—物質感がありますからね。



—平らな板と平らな板が重なると、強く影が出る。

彫った凸凹に黒鉛を塗ると、何というか……

—素材の良さが出てくる。

—そうそう。呼吸しているような、表面が動いているような、そういう感覚かな。

—その変化が宇部の頃だったんですか？

98年から板になってるんですね。93年のABC美術コンクールあたりは、半立体で黒なんです。

—彫り跡の淡い感じは、いつ頃からですか？

それはね、その後。98年くらいは強かった。

—そんな気がしていました(笑)。だんだん薄くなっていったんですね。

最初はいかにも、やったな、ていう感じが出てたね。彫刻刀を使ったねって言われて。それはそれでも良かったんだけど。

—絵画としては認識されたんですか？

それはそう、絵画として。あの頃はフランク・ステラとかの半立体的な絵画があって。

—現代絵画。絵画と彫刻というか、平面と立体。

—そうですね。平面っていう、そういう感じ。

—それから次第に、自分の痕跡を消していくような作品になっていくんですよ。

—そうそう(笑)。やっぱり年とともに。98年頃にはやってやるぞって、インパクトを出すっていう、半立体のときの感じが残っている。

—コンクールは、インパクトの強いものが選ばれる傾向がありますよね。

—そう、最初にインパクトがないとね。

—それなのに痕跡を消していくことを選んだ。でもコンクールには出し続けているわけですよ。

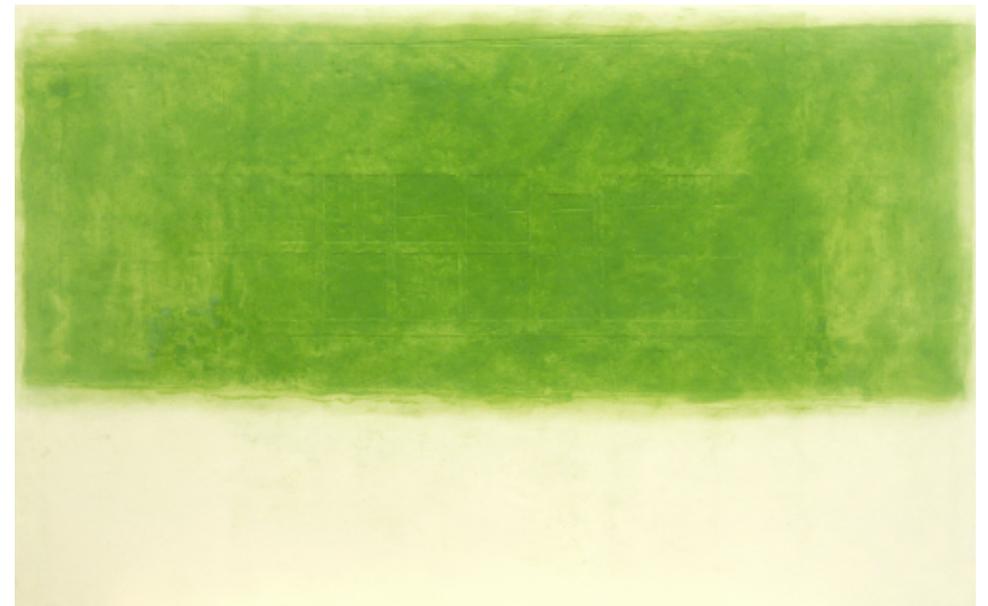
—最後が2006年の世界堂絵画大賞。

—米倉守賞をとっていますね。

—その頃には、もう淡い作品で、結構落ち着いてたかな。

—淡い作品なのに、それでも評価された。

—自分の中では、インパクトを抑えてもそれなりの強さがあるって思っていた。表彰式のときに、米倉守さんが賞を渡してくれるんです。若い頃に米倉



望 View-green 2018年 915×1450mm

さんの『個の創意』という本を西武美術館の本屋で買って、いいなあと思っていたんですよ。だからレセプションでお話をしようと思ったら、ご病気で先に帰られたっていうんですね。その後、手紙が来て、「こういう絵に出会って嬉しかった」と。それから2ヵ月くらいして米倉さんが亡くなった。すごく感じるものがありましたね。

## コンクールは他との競争でも個展は自分の世界を作り上げる

—この表現を突き詰めていこうと思えたんですね。その頃から、コンクールより個展が増えていく。

—2009年あたりからですね。コンクールに出している人を見ていると、個展がうまくないんですよ。コンクールって、他との競争じゃないですか。でも個展は世界を作り上げる。コンクールで賞をとった人が個展をやろうとしたときに、同じような大きい絵を小さくしただけになるんですよ。

—個展の方法論は違うんですね。

—ちょっと感覚が違うんですね。個展は競争とかそういうんじゃない。競争ではいいものが作れないと、違和感がある。個展で自分の世界だけを訴えられるものを、と。

—木藤さんは個展向きの作家な気がする。

—そうですね(笑)。それから大きく変わったんです。個展で、小さくても宝物みたいな作品がでないかと。そういう感覚がある。

—コンクールは一発勝負だけど、個展はそれなりに作品数が必要だし、仕事との兼ね合いもあると思うんですが、その頃はまだ仕事をされていた？

—してましたね。6年前まで仕事していたからね。

—仕事は休まないで？

—何日か休んだのかな。何て言って休んだのか。

—個展ですからって(笑)。

—それは……なかなかねえ(笑)。1週間くらい個展があれば、全部は休まなくて、3日くらいかな。個展のとき、若い人が、「木藤さんは勤めながら

制作しているけど、どうやっているのか」と画廊のオーナーに聞いて、「仕事しながらでもやっている」って話をしてくれと依頼されたこともあって。

—作家にとって重要なことですよね。仕事をはじめると制作ができなくなったり。長く続けることは作家の前提でもあるけど、すごく難しいことです。

うちはおかげで家族の協力もあって、何とか。

—環境の問題は大きい。

私は自分自身も大事にしようと思ってるけど、やっぱり家族もね。自分が存在できる唯一の大事な場所だから、それが良くないと。まわりが気持ち良くいられるようにすることが、自分のね。そういう自然な気持ちが絵の表情にもつながって……

—ご家族に絵の感想を聞くんですか？

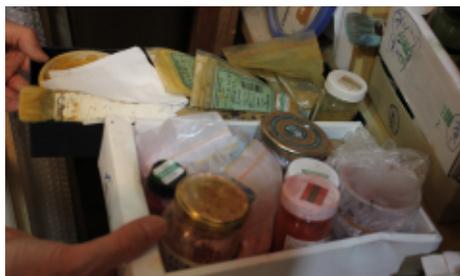
ときどき絵ができあがると、そのへんに置いて。最近はい「いい」が多いんじゃない(笑)。こうしたら良いとか、いろいろ言ったりして。自分以外で最初に客観的に観る人だからね。

—作品の題名のつけ方は？

いくつか整理しているんですけど、幾何学的、直線的なものは「始まりの場所」。これが最初ですね。宇部あたりの絵はこれじゃないですか。他にも「遥」とか「然」とか「望」とかタイトルがあって。それは種類別というか、意味がある。下の方に形があるのが「遥」。画面のどこらへんに収まるか。「待」は真ん中に浮いているような。「望」は上の方に来たんですよ。縦にして真ん中にあるのは「巡」。横に来るのは「添」。

—英語と日本語はどちらが先に決まるんですか？

日本語を先に決めるんですよ。日本語だとイ



メージが強くなるから、英語で……Beginingとか、Somewhereとか、つけて。

—「始まりの場所」は色の黒いシリーズですね。

そうですね。「始まりの場所」とか「何処へ」とか。色彩があるものはちょっと分けている。

—色で分けているけど、形はまた別ですよね。

そうですね。形はなかにあるんですけど。

—色の違いでシリーズのバリエーションがあって、同じタイトルでも何種類も作っている。

そうそう。「遥」なら「遥」でね。番号で分類するっていう感じですね。

—彫っている形は違いますものね。そうすると、組み合わせで無限に作品が生まれてきますね。枠があることで自由になっていく感じでしょうか。色はいつ頃から生まれてきたんですか？

色は……14年くらい前かな。

—「時間の休日」とか。

そうそう。そこらへんだね。ちょっと具象的なやつなんですけどね。

—色を使おうと思ったのはどうしてですか？

一回色を使った作品を作ってみたときに、そのあとで黒をやったら、黒の良さがわかったんですよ。お互いに、色をやると色の良さ、黒をやると黒の良さがわかる。やっぱり黒はいいなあ、とかね。色をやるとまた、色の良さがある。すごく入っていけるというか。

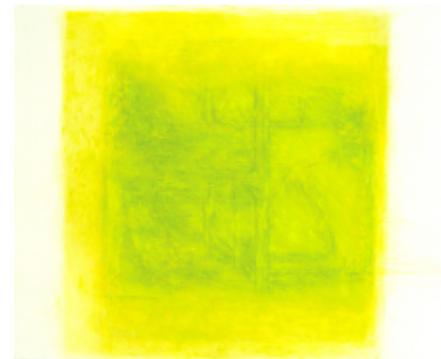
—今は黒の作品と色の作品を並行してやっている。黒から色へ移行した、というわけではなくて。

そうですね。色のときは7、8枚作って、次は黒にまた入っていく。

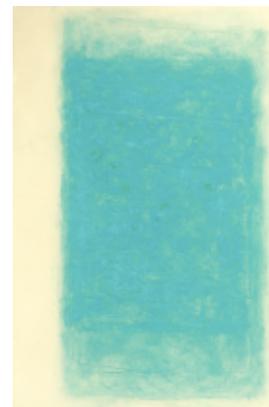
## 凹凸のあるところを削って、 下地で埋めて消していく

—制作の方法なんですけど、まずは板のパネルを買ってきて……

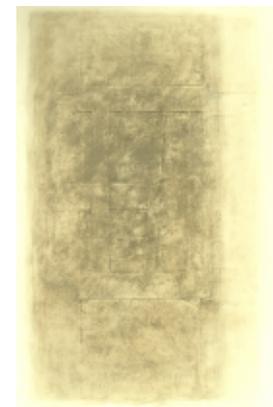
パネルは作るんですよ、自分で。板を買ってきて、そこにエスキースの形を定着させていく。



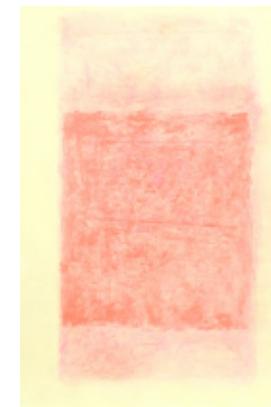
巡 Pilgrim-green 2016年 745×915mm



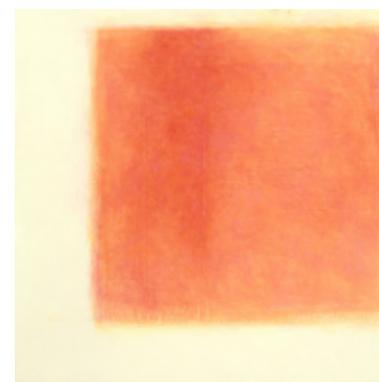
巡 Pilgrim-blue 2018年  
915×615mm



添 Accompany-gray 2018年  
915×610mm



待 Waiting-pink 2018年  
915×605mm



居 Stay-red 2018年 915×915mm



巡 Pilgrim-pink 2021年  
915×670mm

—そうすると、最初に形が決まるのでしょうか。その時点で、何を描くかは決まっている。

うん、決まっている。

—それでパネルを作り、彫刻刀で彫っていく。

形を入れるときに、最初からパネルをつくらないで、板だけでやるんですね。形を入れると、最初は長方形だったものが、もっと短い方がいいとか、中に入ってきた作品がそう言ってくれるみたいな。そうすると板を切り落としたり、逆に広い方がいいというときもあって、足すこともありますね。先に枠をつけちゃうと、変えるのがたいへん。中に入ってくるもので変わってくるから。

—それから形をつくって、やすりをかけて。

彫って行って、やすりをかけて。紙やすりもかけてね。

—紙やすりも使っている。本当に、形は見えるか見えなにかになりますよね。

彫るときは、全部を結構しっかり形を彫っていくんですけど、そうすると、真ん中から隅までかちっとなるじゃないですか。作品によってなんだけど、見ていると、その形が言ってくるんだよね。隅までかちっと彫ってあるのは嫌だよ、とか。そこを埋めていくんですよ。埋めて行って、余白とっしょになる。でも、埋めてもかすかに残る。

—埋めるというのは、物理的に埋めるわけですか？

物理的に埋めたりする。下地でね。

—やすりで平面化するだけではなくて。

それもやります。板の凹凸のあるところを削って、下地で埋めて。

—かなり繊細な表情が出ますね。



それは非常にね。埋めた時点で完成したぐらいな気持ちになってきますね。

—真っ白な作品で……。

真っ白だけでも、いいんじゃないかと思うぐらいに。これでも見せられるんじゃないかって。真っ白で、凹凸があって、脇の方は凹凸が余白に……でもかすかに、だんだん何だかね。その仕事がとても大事で、そのときに、これでもう完成って。色をつけた後から、ここはもうちょっと深くしようとか、凹凸を消そうかなと思うと、そこだけ調子が変わっちゃうんですね。そういうこと、昔はよくやったんだけど、おかしくなっちゃうんで。だんだん白の状態で完成だっというくらいにして。そのあと、色を塗っていく。

—色を塗るときは、顔料を指で塗り込んでいく。

顔料はポロポロ落ちちゃうんで、テレピン(揮発性油)で溶くんですね。それを載せると、乾くと揮発で飛ばないですか。でも載せたものはついてるんですね。それを縦にすると落ちちゃうんで、横にして、こする。

—どのくらい時間をかけるんですか？

けっこう、きりがいい(笑)。2、3日……

—顔料が下地に入り込んでいくんですか？

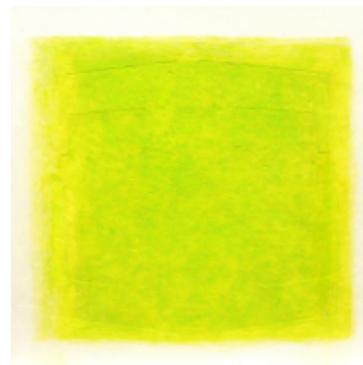
そうそう。最終的には胡粉系の下地の隙間に入り込んでいく。それを何回も繰り返す。それで、もうちょっとこころへんは明るく、とか。濃くなったら、紙やすりをかける。最初のうちは、いかにも紙やすり使いましたっていう感じだったけど、そうじゃなくて、自然とね、風が吹いてばあっと飛んでったみたいな感じにできればと。

## 絵画は自由に世界をつくり出せる 希望のための痕跡

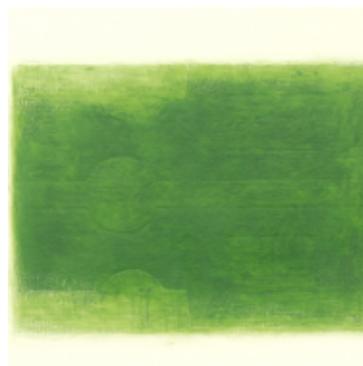
—木藤さんは、作為的な痕跡をできるだけ消して、最後にかすかに残るものを大事にしていますよね。もうこれで行こう、というところが見えてきたのはいつ頃ですか？



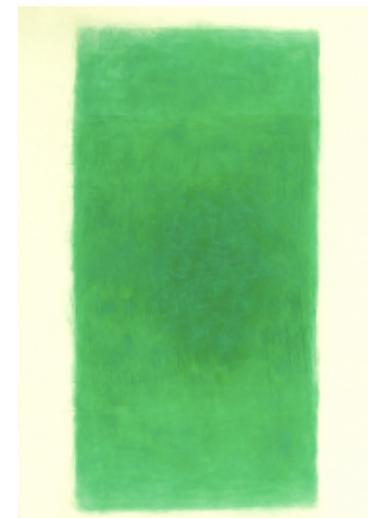
待 Waiting-yellow 2018年 915×913mm



佇 Appearance-green 2021年 915×915mm



待 Waiting-green 2021年 915×915mm



待 Waiting-green 2018年 1300×915mm



添 Accompany-blue 2021年  
1160×915mm

10年前……いや7、8年じゃないかな。  
—そのときは、自分の表現がこれだという手応えがあったわけですね。ほどなく、お仕事もリタイアされて、制作に集中できる環境ができて。

作品がそうになっていく途中で、言葉が入ってくるんですね。思いついたり、出会ったり。いい言葉をつけたしたりするとね。たとえば、緊張感があるけど威圧感がない、とか。画面の中に緊張感があるけど、威圧するものじゃいけない。緊張も威圧も、よく使う言葉なんだけど、両方を組み合わせたときにね、ああ、こういう感じいいなあって。

—木藤さんの言葉の選び方は、意味の似たものの反復というか、特有のリズムがありますね。

ふたつのものを入れて……どっちなんだ、みたいな(笑)。

—物事をより分けながら本質を探していく感じが、作品のかすかな感じと似ている。奥にあるものを見つけていくのか、それとも呼ばれていくのか。自分が探しているものと出会っていく。今回の展示には、希望という言葉を入れましたね。

私のなかでの希望は、言葉にしづらいんだけど、子どもと妻と、私の今がいる……これが希望だった。どうってことないんだけど、こういう穏やかな状態を作り上げるのが希望だった。



それは、自分の生き立ちとして、そうじゃなかった時代があったと言うことが前提にあるんだけど、だからこそ、普通状態でいられることが希望だ、と。

—作品は、ある意味では自我でもあるわけですが、木藤さんの言う希望との関係性は？

子どもが生まれたとき、自分自身の子ども時代を、自分の子どもを通してやりなおしたかった。こういう子ども時代でありたかった、と言うことも希望に込められている。

—その希望のなかに、制作する自分もいるわけでしょうか。

まず、自分が自分らしくなるためのものだったんじゃないかね。自分らしくあることが希望でもあった。

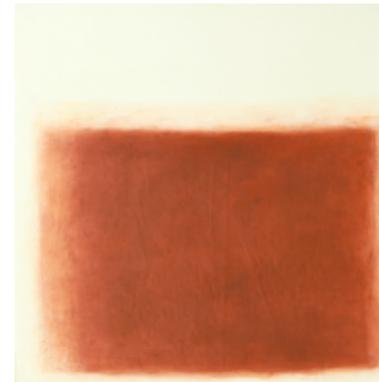
—絵画はその方法論のひとつ？

そこで自分を探し出すというかね。やっと自分をみつけた。いつまでも、画面に手を添え続けなければならない。

—生き方は無形のものだけど、作品は有形にして確認できますね。

自分が通ってきた全部が、そのまま技法にも出てくるし、言葉にも出てくるし。なぜ彫るのか、なぜ形が動くのかって。ただ画面構成のためだけじゃなくて、こっちにも動ける、上にも行ける。そういう気持ちよさ。固まっていなくて、動けるんだって。それが私にとって、希望だったんです。画面のなかでは自由に世界をつくり出せるというのが。絵画は希望のための痕跡。その痕跡は、自分にとって必要なものだったんですね。  
—木藤さんの生きてこられた過程と作品のつながりがよくわかりました。今回の展示は、前期、中期、後期と、毎月作品ががらりと入れ替わるので、その空間の変化も見どころですね。今日はどうもありがとうございました。

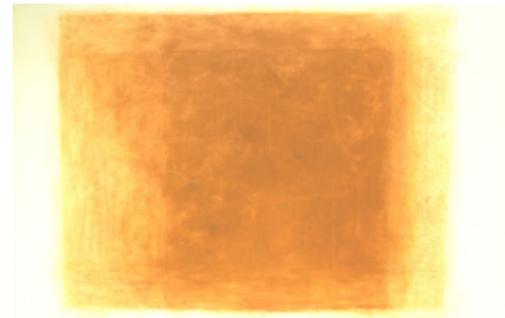
(2021年4月12日、聞き手：岡村幸宣)



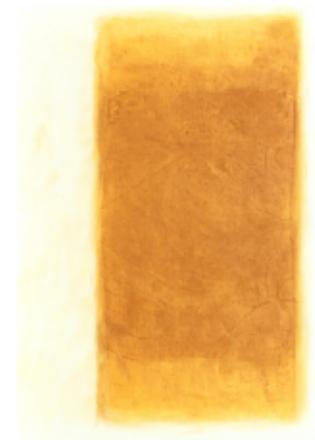
然 Calm-brown 2017年 915×915mm



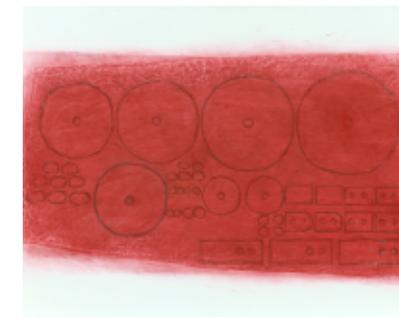
址 Site-brown 2016年 915×915mm



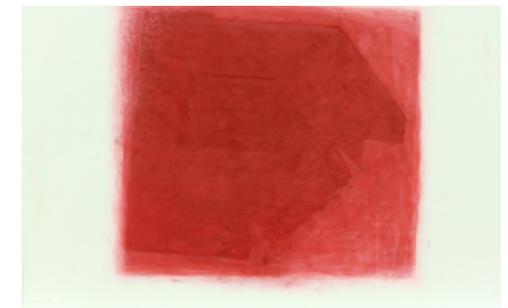
巡 Pilgrim-ocher 2018年 915×1160mm



漆 Accompany-ocher 2021年 915×620mm



古代 Ancient-red 2020年 720×915mm



彼方 Faraway-red 2021年 600×915mm



## 木藤 恭二郎 きとう きょうじろう

1952 埼玉県川越市生まれ。  
1976 埼玉大学卒業

### 個展

1997 小野画廊(東京銀座)  
2007 川越蔵の茶屋(埼玉)  
2011 宇フォーラム美術館(東京・国立)  
2012 「時間の休日」Gallery FACE TO FACE(東京・吉祥寺)  
2013 「始まりの場所」ギャラリーイトモス(東京・日本橋)  
「始まりの場所」ガレリア青猫(東京・西荻窪)  
2014 「遠い音」ギャラリーイトモス(東京・日本橋)  
2015 「時間の休日-2015」ギャラリー花風林(東京・国立)  
「時間の休日-9月」ギャラリー花風林(東京・国立)  
「時間の系譜」ガレリア青猫(東京・西荻窪)  
2016 「フォルム」ギャラリー砂扇(東京・日本橋)  
2020 「歳月の記録」ギャラリー砂翁(東京・日本橋)  
「始まりの場所」ギャラリー童夢(埼玉・川越)

### グループ展

1989～1996 第19～25回現代日本美術展(東京/他)  
1990 日本国際美術展(東京/他)  
第16回日仏現代美術展/日本テレビ奨励賞(パリ/東京)  
1991 第17回日仏現代美術展/佳作賞(パリ/東京)  
1993 第19回日仏現代美術展/佳作賞(パリ/東京)  
ABC美術コンクール/優秀賞(大阪/東京)  
1995 第2回別府現代絵画展/優秀賞(大分・別府)  
1996 第3回別府現代絵画展/準大賞(大分・別府)  
現代美術小品展/優秀賞(東京)  
1998 第13回現代日本絵画展・宇部ビエンナーレ/渡辺翁記念文化協会賞(山口・宇部)  
1999 熊谷守一記念大賞展/佳作賞(岐阜)  
第6回風の芸術展・ビエンナーレまくらざき(鹿児島・枕崎)  
第17回伊豆美術国際絵画展/大賞(静岡・伊東)  
ATC大賞展/佳作賞(愛知・東海)  
全日本アートサロン絵画大賞展/優秀賞(東京)  
2000 坂出アートグランプリ/秀作賞(香川・坂出)  
雪舟ますだ美術大賞展/奨励賞(島根・増田)  
2001 三岸好太郎・節子展賞(北海道・札幌)  
池田満寿夫記念芸術展賞(東京/大阪)  
2002 第20回上野の森美術館大賞展(東京)  
はままつ全国絵画展/準大賞(静岡・浜松)  
利根山光人記念ビエンナーレ/奨励賞(岩手・北上)  
2006 第2回世界堂絵画大賞展/審査員特別賞・米倉守賞(東京)  
2011 Line art 30 ベルギーアートフェア(ベルギー・ゲント)  
2013 「ギ〜ジャスパールとともに」ギャラリーイトモス(東京・日本橋)  
2013・17 CONTEMPORARY ART NOW KAWAGOE アートギャラリー呼友館(埼玉・川越)  
2017 KOEDO KAWAGOE TRIENNALE/奨励賞(埼玉・川越)  
2017・18 「宙展」ギャラリー蔵里(埼玉・川越)  
2019 常設 le sentiment des choses (パリ)  
2021 「宙展」ギャラリー蔵里(埼玉・川越)

収蔵 別府市美術館(大分)、浜松市美術館(静岡)、伊東市(静岡)、宇フォーラム美術館(東京)